

ベナンの風便り

2009年12月号

みなさんお元気ですか？もうすぐ冬休みですね。冬休みといったらクリスマスやお正月などのイベントが盛りだくさん。ベナンでも道端でクリスマスプレゼントを売っていたり、子どもたちが「カレタ」というお面をつけてお小遣い稼ぎをしたりと雰囲気は盛り上がってきているのですが、日本人は寒いクリスマスに慣れてしまっているため、暑い中のクリスマスはどうもしっくりきません。

さて今回はベナンの医療事情について、看護師として派遣されている協力隊員が、現場での実体験を元に書いた文章を紹介します。



肌の黒いサンタクロース

ベナンの医療事情

ベナンで行われている医療は皆さんの想像以上に進んでいると思います。国の管轄する母子病院は、西アフリカ最大の母子病院と言われており、NICU（赤ちゃんのための集中治療室）があるほどです。もちろん日本に比べると、医師をはじめ資格を持った医療スタッフの数は絶対的に不足していますが、日本とベナンでは各職種の担当している業務内容が大きく異なるので、そのおかげで成り立っているのだと思います。医師の業務に関しては日本と変わりありませんが、看護師はほとんど医者と同じような役割を担っており、患者さんの診察から検査の指示・薬の処方まで行い、特殊分野の教育を受けている看護師は、麻酔や手術も行います。直接的な医療行為（注射・採血など）は看護助手が行い、助手も処方箋を書くことができます。日本の看護師が担っている日常生活の援助は皆無に等しく、体を清潔に保つ、食事や排泄の介助をするというような看護は全て家族が行います。ベナンにおいて医療者は特別に高い地位にあり、医療者の患者さんに対する対応は良いとは言えないのが現状です。大人に対してはもちろん、小さな子供にですら、気に入らなければ叩く、怒鳴りつける、物を投げつけるなどの行為は日常的に見られ、患者さんが泣いていることもあります。病院レベルの施設になると、手術室もあり、緊急帝王切開をはじめ、ヘルニア、交通外傷、甲状腺腫瘍摘出、脂肪腫摘出など手術を行える機能もあります。入院病棟もありますが、患者さんに割り当てられるのはベッドだけで、シーツなどの寝具は一切ありません。それでも病院は他の保健センターなどの末端組織に比べると器材はある方です。ですが、患者さんに安全かつ安心できる医療を提供できるだけの十分な器材はありません。患者さんが来院して、まず行うべきことは、熱をはかるための体温計1つから、必要な器材や薬剤を買いに行くことなのです。日本のように治療に必要な器材や薬剤は病棟には常設されておらず、緊急性の高い場合（命に関わるような状況）であっても直ちに処置ができないのが現状です。そのため、処置の開始までに時間を要し、ひいては患者さんの命を脅かすことにもなりかねないのです。そのような状況なので、熱がある患者さんの苦痛を取り除くために冷やしたいと思っても、冷蔵庫も冷凍庫もないので冷やすという簡単な行為すらできません。汗を沢山かいていて拭き取りたくても、拭き取るタオルも着替えもありません。

しかもこちらの医療スタッフはそれに対して疑問に思わないだけでなく、吐物や排泄物、血液で自分達が汚染されることを嫌がり、不潔なことは全て家族に行わせます。日本のように他人の気持ちを押し量り、看護するということは決してありませんし、それ以前に患者さんの命を守るというような責任感もプロ意識もありません。日本のような「人を人として大切にする」という基本的な概念が欠落しているように感じられてなりません。

病気に関してはやはり熱帯地域特有の感染症であるマラリアにかかる患者さんがとても多く、5歳以下の子供の1番の死亡原因です。マラリアは死亡に至る可能性のある怖い病気ですが、きちんと治療を行うことができれば助かる病気でもあります。ベナンにおいてはマラリア予防のために初回の妊婦検診時、9ヶ月の予防接種終了時に無料で蚊帳を配布しています。ですが、地域住民（ことに村落部）の健康管理に対する意識は高いとは言えず、病気や子供の栄養など様々な面で知識不足も目立ち、十分なマラリア対策はされていないのだと思います。その結果として幼い子供達が連日小児科に運ばれて来ます。マラリアの重要な症状（病気の進行状況の判断要素になる）として貧血があげられ、貧血の判断をする検査でヘモグロビン（Hb）という値があります。正常値（男性）14~16g/dl、（女性）12~14g/dlなのですが、運ばれてくる子供達の貧血は重症でヘモグロビン2g/dlということもあります！！輸血が必要とされる値はヘモグロビン7g/dl以下なので、どの程度重症であるかおわかり頂けると思います。なぜこんなに重症になるまで病院にみんな来ないのか？と言えば、先に挙げた知識不足も大きな要因ですが、加えて大きな要因になっているのが貧困です。小児科に来る子供達の中には、お金が払えずに必要な治療が十分に受けられないという子供達が多く見受けられます。ある日病院にやってきた6歳の男の子は、40度の発熱と貧血が主訴で、診断名は重症マラリアでした。熱を下げるための解熱剤と輸血が必要でしたが、その子の父親はナイジェリア（ベナンの隣国）に出稼ぎに行っていて、母親はその子を置いて大分前に失踪、子供を連れて来た祖父にはお金がありませんでした。日本円にすると診察代100円、解熱剤200~300円、点滴と輸血をするためのカテーテル（血管内に留置する針）及び器材200円、輸血400円、検査代900円で合計2000円程度ですが、平均月収6000円程度のこの国の人達にとって、医療費は高額で保険もありません。明らかにすべき治療がわかっても、貧困のために治療ができないのです。結局この子は1番安い解熱剤だけを購入し、少し熱を下げる程度の治療だけを行いました。また、ある生後間もない赤ちゃんは、破傷風という感染症にかかって入院しており、医療スタッフは薬を買うように家族に処方箋を渡しましたが、お金がなくて薬を買えませんでした。医療スタッフも家族もその状況を放置し、赤ちゃんは必要な治療を受けられないまま、母親が気づいた時には呼吸が停止していました。妊娠中の母親が予防接種さえしていれば赤ちゃんは破傷風にはかかりませんし、治療が適切に行われていればこの赤ちゃんは元気になることができたのです。

今、ベナンの医療現場は諸外国からの援助を受け、医療体制も少しずつ整備されてきてはいますが、医師をはじめ教育レベルの高い人達は現状に疑問を抱き、スタッフに意識改善を働きかけてはいますが、まだまだ改善すべきところは沢山あると思います。日本のような先進国では、最低限の条件は揃っているのに、医療や看護の質という点にも目が向けられ、きめ細やかな医療が提供できています。ですが、現時点のベナンの医療レベルでは、まず十分な器材および薬剤の常設を定着させ、資格を持った医療スタッフを十分に配置することを優先し、その上で患者さんを尊重する医療の質の改善を順序立てて行っていくしかないのだと思います。そして、医療事情が簡単に改善できない状況にあるからこそ、住民に対する働きかけに重点を置き、「病気を予防する」すなわち病院に来る必要性を少なくするための予防的なアプローチを大切にしていかなければいけないのだとも考えています。

ブログ更新中

ベナンの風：<http://benin.seesaa.net/>